

新增補
日本文学史
近世

久松潜一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

増補新版日本文学史 近世

昭和52年4月23日発行 久松潜一編 発行所 至文堂
東京都新宿区弘方町27 東京(260)2211(代) 発行者 佐藤泰三

印刷 誠之印刷株式会社 製本 凸版印刷

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なって、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後にまつところが多い。私自らも日本文学史の研究を一つの課題として多年考察を続けており、これに関する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかりと立てることが目標であった。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることをないために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便なことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもとと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後も進展してやまない。本書にしても、文学史の一つの段階を表すものではあろうが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果たすことはできるであろう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもついで執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・田崎治泰氏らが世を去られたためもあって新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顯智氏は書き改めを完成されたのちに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかつた佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松 潜 一

このたび増補新版を世に送るに当って、学界の進展にともなう若干の増補訂正を行い、年表も昭和五十年までの事項を追補した。また年表編と総説編とを再び一冊にまとめることにした。またその間に喜多義勇・小林智昭・藤川忠治・成瀬正勝・広田栄太郎諸氏が世を去られたのは感慨の深いものがある。

昭和五十年八月

久松 潜 一

目次

概説

社会組織の特殊性 (一) — 民衆の享樂機關 (二) — 階級的混淆 (三) — 思想の
対立と交渉 (四) — 思想の反映 (五) — 現世主義と享樂文學 (六) — 理想主義
と浪漫的文學 (七) — 両思想の矛盾衝突と文學 (八)

前期

第一章 仮名草子

仮名草子の定義 (一) — 仮名草子の發生事情 (二) — 仮名草子の版本 (三)
— 仮名草子の作者の問題 (四) — 仮名草子の作品と分類 (五) — 仮名草子の
価値と影響 (六)

第二章 浮世草子

一 西鶴

浮世草子の名称 (一) — 町人社会とその性格 (二) — 西鶴の生涯 (三) — 阿蘭
陀俳諧 (四) — 小説への道 (五) — 好色物 (六) — 武家物 (七) — 町人物 (八)
— 雑話物その他 (九) — 西鶴の小説の展開について (一〇)

二 西鶴以外の浮世草子

1	西鶴と同時代の浮世草子……………	八二
2	西鶴の模倣作(八三) 西鶴没後の浮世草子(八文字屋本以外)…………… 好色本(八六)―西沢一風(八七)―好色本以外の浮世草子(八九)―事実物(九二) ―都の錦(九二)	八五
3	八文字屋時代…………… (一) 分裂以前…………… 役者評判記(九三)―西鶴の模倣(九五) (二) 分立時代…………… 分立後の其磧(九六)―気質物(九七)―分立後の八文字屋(九八) (三) 和解時代…………… 和解後の其磧(一〇〇)―其磧晩年の作(一〇一)	九三
4	其磧没後…………… 多田南嶺(一〇四)―和沢太郎(一〇六)―永井堂亀友(一〇八)―気質物の末流(一〇九)―北条団水(一一〇)―歌舞伎狂言本(一一〇)―風流曲三味線(一一一)―気質物(一二三)―風瓢子(一二三)―和解以後の作品(一二四)	一〇四
増	補訂正…………… 西鶴の模倣作(一二五)―西沢一風(一二六)―好色本以外の浮世草子(一二四)―都の錦(一二五)―宝永の出版界(一二五)―八文字屋時代其磧分裂以前(一二六)―分立時代(一二七)―分立後の其磧(一二七)―和解時代(一二八)―多田南嶺(一二九)―南嶺没後(一二九)	一二三

一 近松・海音まで……………三

1 浄瑠璃の起源……………三

浄瑠璃の起源十二段草子（三三）―流派の発生（三三）―説経劇（三三）―古

浄瑠璃や説経の内容（三四）―金平物（三四）

2 宇治加賀掾……………一六

経歴（三六）―業績（三七）―近松との関係（三七）

3 竹本義太夫……………一六

伝記（三六）―近松と提携（三三）

4 近松門左衛門……………一三

伝記（三三）―作者の地位（三三）

5 近松の浄瑠璃……………一四

加賀掾正本（三三）―義太夫正本（三三）―時代武道物（二七）―時代傾城物

（三九）―世話物（四〇）―心中物（二四）―殺人物（四二）―姦通物（四二）―

犯罪物（四二）―狂乱物（二四）―傾城物（四三）―近松の浄瑠璃上演形式

（四三）

6 近松の悲劇脚色上の手法……………一三

悲劇（二四）―運命劇（四四）―性格劇（四六）―敵役の設定（二四）

7 義太夫の門人……………一五

竹本政太夫（二五）―豊竹若太夫（二五）

8 紀海音付錦文流……………一六

紀海音（二五）―錦文流（二五）

二 出雲以後……………一五

1	全盛期の浄瑠璃	一五
---	---------	----

近松没後の浄瑠璃 (二五) — 竹田出雲 (二六) — 蘆屋道満大内鑑 (二六) — 菅原伝授手習鑑 (二六) — 義経千本桜 (二六) — 仮名手本忠臣蔵 (二六) — 双蝶々曲輪日記 (二六) — 長谷川千四と松田文耕堂 (二六) — 文耕堂 (二六) — 並木宗輔 (二六)

2	爛熟期の浄瑠璃	一七
---	---------	----

近松半二 (二七) — 奥州安達原 (二七) — 本朝廿四孝 (二七) — 関取千両轍 (二七) — 傾城阿波の鳴門 (二七) — 妹背山婦女庭訓 (二七) — 新版歌祭文 (二七) — 伊賀越道中双六 (二七) — 菅専助 (二八) — 江戸の浄瑠璃作者 (二八) — 神靈矢口渡 (二八) — 恋娘昔八丈 (二八) — 伽羅先代萩 (二八) — 碁太平記白石嘶 (二八) — 加賀見山田錦絵 (二八)

第四章	歌 舞 伎	一八
-----	-------	----

歌舞伎の特質 (二八) — 浄瑠璃との関係 (二八)

一	発 生 期	一七
---	-------	----

初期歌舞伎の変遷 (二八)

1	お 国 の 出 現	一七
---	-----------	----

お国と時勢粧 (二八) — カブキ踊 (二八) — 遊廓の発達 (二九) — 女歌舞伎 (二九)

2	若 衆 歌 舞 伎	一九
---	-----------	----

江戸の劇場 (二九)

3	猿若狂言と江戸の歌舞伎	一九
---	-------------	----

江戸歌舞伎の開祖 (二九) — 猿若狂言 (二九) — 六方 (二九)

二	発 達 期 前 期	一九
---	-----------	----

1	統狂言の發生……………	一六
	統狂言（一九）——登場人物の複雑化（二〇〇）	
2	上方統狂言……………	二〇〇
	写實的演出の發生（二〇〇）——舞踊劇より科白劇へ（二〇一）	
3	上方狂言の作者と作品……………	二〇三
	富永平兵衛（二〇四）——津打治兵衛（二〇五）——近松門左衛門（二〇五）	
4	江戸統狂言……………	二〇七
	荒事芸の成長……………	二〇七
	荒事芸（二〇八）——団十郎の荒事（二〇九）——江戸の統狂言（二〇九）	
	江戸狂言の作者と作品……………	二一〇
	都伝内（二一〇）——三升屋兵庫（二一一）——中村七三郎（二一二）	
三	發達期後期……………	二一二
1	操劇との交渉……………	二一二
	操劇の影響（二二三）	
2	上方狂言の傾向と作者……………	二二三
	上方の劇壇……………	二二三
	操劇との接触（二三五）	
	上方狂言の作者と作品……………	二三五
	金子吉左衛門（二三五）——福岡弥五郎（二三五）——安達三郎左衛門（二三六）——吾妻三八（二三六）	
3	江戸狂言の傾向と作者……………	二三七
	江戸の劇壇……………	二三七
	二代目団十郎（二三七）	

(一) 江戸狂言の作者と作品……………	三九
津打治兵衛(二代)(三九)	

第五章 俳諧……………	三三
-------------	----

一 貞門時代……………	三三
-------------	----

宗鑑・守武より貞徳へ(三三) — 松永貞徳の俳諧(三三) — 貞徳の俳諧論(二
 三) — 貞徳の俳諧論(三三) — 貞徳時代の俳人(三三) — 貞門の人々(三三)

二 談林時代……………	三四
-------------	----

貞門から談林へ(三四) — 西山宗因(三四) — 談林の俳風(三三) — 談林の俳風
 (三四) — 談林の人々(三四)

三 蕉風時代……………	三四
-------------	----

蕉風時代の概観(三四) — 蕉風の同伴者(三四) — 松尾芭蕉(四五) — 蕉風の俳
 諧(三〇)

四 蕉門の俳人と芭蕉没後の俳壇……………	三六
----------------------	----

蕉門十哲(三六) — 其角(三六) — 嵐雪(三六) — 去来(三七) — 丈草(三六) —
 支考(三七) — 許六(三七) — 杉風・野坡・越人・北枝(三七) — 芭蕉没後の
 趨勢(三七) — 俳壇の中心勢力(三七) — 洒落風(三七) — 比喩体の俳諧(三七)
 — 化鳥風(三七) — 美濃風(三七) — 伊勢風(三七) — 半時庵流(三七) — 五色
 墨の運動(三七) — 五色墨運動の意義(三七) — 五色墨運動の成果(三七)

第六章 狂歌と前句付……………	三六
-----------------	----

一 狂 歌……………三六

狂歌の定義（二六）―曉月坊（二六）―幽斎とその周囲（二六）―貞徳とその門人（二六）―石田未得（二六）―半井卜養（二六）―池田正式（二六）―豊蔵坊信海（二六）―生白堂行風（二六）―永田貞柳（二六）―風水軒白玉（二六）―柳門の人々（二六）―鈍永鈍全の興歌（二六）

二 前 句 付……………三九

前句付の源流（二九）―前句付の起源（二九）―前句付の流行（二九）―句集の刊行（二九）―前句の輕妙化（三〇）―おかしみとうがち（三〇）―前句付の變遷（三〇）―箒付（三〇）―箒付の風調（三〇）―雜俳諸体の發生（三〇）

第七章 国学と漢学……………三四

一 国 学……………三四

1 国学の意義と範圍……………三四

国学の意味（三四）

2 国学と文学……………三六

国学の成立（三六）―古文辞学の影響と契沖の歌学（三七）

3 国学の發生史的考察……………三〇

歌学の革新（三〇）―木瀬三之（三二）―長流・茂睡（三三）

4 黎明期の国学……………三五

契沖（三五）―春満（三六）

5 契沖・春満と近世儒学の交渉……………三三

国学と儒学（三三）―仁斎と契沖（三三）―春満と儒学古学派（三四）

二 漢 学

三六

朱子学(三六) — 林羅山とその系統(三七) — 那波活所とその門流(三九) — 石川丈山(四〇) — 松永尺五(四〇) — 木下順庵とその門人(四一) — 林家の伝流(四二) — 藩校(四三) — 民間の儒者(四四) — 敬義学派(四四) — 陽明学派(四五) — 古義学派(四六) — 古文辞学派(四六) — 古注学(四七) — 折衷学派(四八)

第八章 和歌と歌謡

三五

一 和 歌

三五

序説(三五) — 細川幽斎(三五) — 幽斎の門流(三五) — 元政上人(三六) — 木下長嘯子(三七) — 新機運の動きと木瀬三之(三六) — 下河辺長流と僧契沖(三七) — 戸田茂睡(三九) — 荷田春満と在満(四〇) — 賀茂真淵(四一) — 真淵門下の万葉派歌人(四二) — 江戸派の歌人(四二) — 本居宣長(四三)

二 歌 謡

三七

概観(三七) — 隆達小歌(三七) — 組歌(三七) — 長歌・端歌(三七) — 弄斎・片撥(三七) — 投節(三八) — 平九・破歌・細り・れんば・ぬめり等(三八) — 風流踊歌(三九) — 伊勢踊(三九) — 地方出自踊歌(三九) — 踊口説・踊音頭・町踊(四〇) — 歌舞伎踊歌(四一) — 歌謡集(四二) — 上方唄(四二) — 江戸歌(四二) — 地方歌(四三)

後 期.....三九三

第一章 歌 舞 伎.....三九六

一 南 北 ま で.....三九六

1 十八世紀後半期.....三九七

概観(三九七) — 三都の歌舞伎の消長(三九七) — 脚色の進歩(四〇〇) — 脚本の地位の向上(四〇五) — 舞台の整備(四〇五) — 壕越二三治(四〇七) — 金井三笑(四〇八) — 桜田治助(四〇九) — 並木正三(四二二) — 奈河亀輔(四二三) — 並木五瓶(四二三)

2 十九世紀前期.....四〇四

退廃的気分(四〇四) — 生世話の成立(四二五) — 形式美の確立(四二六) — 脚本の重視(四二七) — 鶴屋南北(四二八)

二 黙阿弥を中心に.....四二二

1 概 観.....四二三

衰退の理由(四二三) — 創作態度(四四四) — おもな俳優(四四四)

2 先 輩 作 者.....四五五

三升屋二三治(四五五) — 三世並木五瓶(四六六) — 五世鶴屋南北(四六六) — 宝田寿助(四七〇) — 四世中村重助(四七〇)

3 上 方 作 者.....四六八

二世金沢竜玉(四六八) — 西沢一鳳(四六九)

4 治助と如阜.....四六九

三世桜田治助(四六九) — 三世瀬川如阜(四七二)

5 二世河竹新七（黙阿弥）…………… 四三

経歴と作品（四三）——白浪物の内容（四三）——その他の世話物（四三）——浄瑠璃所作事（四一）

第二章 俳諧…………… 四四

一 蕉風復興への動勢…………… 四三

中興期俳諧序説（四三）——五色墨と伊勢派（四三）——仮名詩の流行と蕪村の自由詩（四四）——復古思潮と芭蕉五十回忌（四五）

二 中興俳壇の諸家…………… 四七

離俗の俳諧——蕪村・太祇・召波（四七）——東海の復古運動——櫛良と暁台（四八）——関吏・麦水と白雄の復古先陣論争（四九）——片歌論争その他——天下ひと手の風（四九）——安永年間の夜半亭の盛況（五〇）——暁台の天下統一運動（五一）

三 文化・文政以後…………… 四六

1 文化文政期の俳諧…………… 四六

概観（四六）——鈴木道彦（四六）——井上士朗（四六）——夏目成美（四七）——大伴大江丸（四七）——小林一茶（四八）——岩間乙二（五〇）

2 天保以降の俳諧…………… 五〇

概観（五一）——田川鳳朗（五一）——成田蒼虬（五一）——桜井梅室（五一）

第三章 川柳と狂歌…………… 五八

一 川柳…………… 五八

近世後期の雑俳（五八）——川柳の名目（五九）——柄井川柳（五九）——万句合（五九）

